The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	原爆文学と朝鮮人被爆者 ・在韓被爆者 : 御庄博実の詩業を中心に
Author(s)	宇野田, 尚哉
Citation	グローバル日本研究クラスター報告書. 2018, 1, p. 19-26
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68046
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

原爆文学と朝鮮人被爆者・在韓被爆者

―御庄博実の詩業を中心に―

宇野田 尚哉

はじめに

川口さんが「東アジアという視座」から「原爆文学研究の現状と課題」についてお話しになりましたので，それを踏まえて私からは「原爆文学と朝鮮人被爆者・在韓被爆者」というテーマでお話しさせていただきます。具体的には，詩人御庄博実さんの詩業を中心に据えつつ，医師丸屋博さんの活動にも触れながら，お話しさせていただくことになるのですが，あらかじめご説明しておきますと，御庄博実さんと丸屋博さんというのは，医師で詩人の，一人の人物です。「丸屋博」が本名で医師としてのお名前，「御庄博実」がペンネームで詩人としてのお名前です。以下，敬称は省略してお話しさせていただきます。

本報告では，被爆体験をめぐる認識枠組は日韓でどう違うかを確認したあと（第 1 節），それぞれの認識枠組を揺るがす存在として朝鮮人被爆者がいることを指摘します(第 2 節)。そして，原爆文学とコリアンの被爆者との関係について見たうえで（第 3 節），丸屋博／御庄博実と在韓被爆者李順基（イスンギ）との交流を手がかりとしながら，「原爆文学と朝鮮人被爆者・在韓被爆者」について考えてみたいと思います（第 4 節・第 5 節）。

１．被爆体験をめぐる認識枠組は日韓でどう違うか？

まずは，被爆体験めぐる認識枠組は日韓でどう違うか，という問題について考えてみたいと思います。

敗戦後，日本は，原爆を投下した戦勝国アメリカに 7 年間も占領されていました。また，日本は，独立を回復すると同時にアメリカと軍事同盟を結んでアメリカの核の傘のもとに入りました。冷戦構造のもと，日本は西側陣営にしっかりと組み込まれていたといえます。

その結果，日本では，反核運動は，原爆を投下したアメリカの責任を追及する方向には向かいませんでした。もちろん被爆者の間にはアメリカに対する怒りや憎しみがあったわけですが，日本の置かれた国際的立場が，それを表立てることを難しくしたといえます。その結果，日本では，被爆体験は，人類にとって三たび繰り返されてはならない体験として，その意味で人類にとって普遍的な意味を持つ体験として，語られてきました。

それに対して，韓国においては，原爆は，韓国を日本による植民地支配から解放したものの１つと捉えられているのではないか，その限りで，人類の存在を脅かす絶対悪とは捉えられていないのではないかと思います。その観点からすると，広島・長崎の被爆体験も，韓国を植民地支配した日本人が支払うべき応分の代償であったと捉えられることになるのかもしれません。

被爆体験をめぐる日韓の認識枠組にはこのような対立関係があるということを，まずは押さえておく必要があるように思います。

２．私たちの認識枠組を揺るがす朝鮮人被爆者

このような 2 つの認識枠組の対立関係を揺るがす存在が，朝鮮人の被爆者です。この問題に関わる最も重要な書物は，市場淳子『ヒロシマを持ちかえった人々』(凱風社，2000 年，新装増補版 2005 年。韓国語版は，이치바 준코 지음 / 이제수 옮김『한국의 히로시마 ： 20 세기 백년의 분노，한국인원폭피해자들은 누구인가』，역사비평사，2003 年）ですが，同書は，朝鮮人被爆者は広島市で約 5 万人，長崎市で約 2 万人，そのうち被爆死者は広島市で約 3 万人，長崎市で約 1 万人で，「全被爆者の約 1 割が朝鮮人であった」と指摘しています。私は，この事実自体が韓国側の認識枠組を揺るがす力を持っているのではないかと考えますが，いかがでしょうか。

ところで，『ヒロシマを持ちかえった人々』は，次のような，きわめて重要な指摘も行っています。日本人被爆者の被爆体験の語りは原爆が炸裂した瞬間から始まるのに対して，朝鮮人被爆者の被爆体験の語りはなぜ自分は広島あるいは長崎に居合わせたのかを語るところから始まる，というのです。この指摘は，朝鮮人被爆者にとっては，植民地支配下での困窮や，植民地支配下での徴用が，広島あるいは長崎での被爆と，ひと連なりのものとしてあったことを示しています。朝鮮人被爆者の被爆体験を貫く植民地主義。この点は，人類にとって普遍的な意味を持つ体験としてのみ被爆体験を語りがちな，日本側の認識枠組を揺るがす力を持っています。

じつは，日本においては，この点は，運動においても，表現においても，1960 年代後半以来，自覚化されてきています。そのような自覚化を促したのは，より広い文脈に即していえば，日韓条約反対運動，ベトナム反戦運動，入管闘争などの高揚であり，より個別的な文脈に即していえば，密航という手段で日本社会に立ち現れ被爆者として治療を受ける権利を主張した在韓被爆者孫振斗の存在と彼を支援する日本側の運動の高揚でした。川口さんが紹介された栗原貞子の「ヒロシマというとき」は，日本の加害性の自覚なしに被爆体験を語ってもアジアの人々には届かないという，この時期に生まれてくる認識を象徴する作品の 1 つでもあります。(ただし，この作品には朝鮮人被爆者は登場しません。川口さんが提起しておられるようなこの作品の読み直しをさらに推し進めようとする際には，この点は重要なポイ

ントになるのではないかと思います)。

このように，日本の運動／表現においては，日本の加害性の自覚なしに被爆体験を語ってもアジアの人々には届かないという認識は，すでに長い歴史を持っているわけですが，それが主流化されているわけではもちろんありません。主流を占めているのは,「唯一の被爆国」という日本を特権化する語り，被爆体験を語る権利を日本が独占してしまいたいという欲望です。この国際ワークショップ「東アジアから原爆文学を読みなおす」の，日本側における最も重要な課題は，そこを突破して，韓国の，ひいては東アジアの読者と共有可能な認識枠組を構築することにある，といえるだろうと思います。

３．原爆文学とコリアンの被爆者

解放後，コリアンの被爆者は，冷戦の構造的負荷のもと，さまざまなかたちで分断され，沈黙させられてきました。分断されてきたというのは，単純に在日・在韓・在朝に分断されてきたというだけでなく，たとえば在日コリアンの被爆者が韓国支持か共和国支持かの政治的立場性によって分断されるといったこともありました。コリアンの被爆者が，被爆者であるという一点においてさまざまな分断線を越えて結集し声をあげることはきわめて難しかったのであり，日本社会の側の差別意識とも相俟って，コリアンの被爆者は見えにくい存在におしとどめられ続けてきたといえます。

コリアンの被爆者は，被爆地の日常のなかでは身近な存在だったはずなのですが，原爆文学の作品にコリアンの被爆者が登場することは，後述する御庄博実の詩作品のような例外的事例を別とすれば，まれであるように思います。原爆文学においても，コリアンの被爆者は，見えにくい存在におしとどめられ続けてきたわけです。また，コリアンの被爆者自身が狭義の文学作品を書くということも，ほとんどなかったのではないでしょうか。植民地支配下での貧困や徴用の結果広島・長崎への移動を余儀なくされそこで原爆に行き合わせたコリアンの被爆者の場合，狭義の文学作品を書きうるほどの教育を受ける機会に恵まれた人はほとんどいなかったといった事情もあったでしょうし，韓国の場合は，かりに自分の被爆体験に基づく作品を発表したとしても肯定的に評価される可能性はほとんどないばかりかかえって差別を誘発する可能性のほうが高かった，というような事情もあったかもしれません。いずれにせよ，原爆文学においては，登場人物の面でも，書き手の面でも，コリアンの被爆者は不在なのです。私は，このような不在自体が，議論されるべき問題であると思います。

原爆文学とコリアンの被爆者との関係を問う問い方としては，いま述べたようにその不在の意味を問うという問い方が一つあるわけですが，もう一つの問い方としては，既存の文学の概念自体を転換してしまうという問い方もあります。1960 年代後半以来の取り組みのなかで，コリアンの被爆者からの聞き書き，コリアンの被爆者による手記はたくさん蓄

積されていますから，既存の文学の概念にはおさまりにくいそれらをも包括する方向で私たちの「原爆文学」という概念を組み立てなおす，という問い方です。研究対象の不在を嘆くのではなく，「原爆文学」研究の側からコリアンの被爆者に寄り添っていくようなアプローチをとることが必要なのではないか，とりわけ韓国の研究者にそのようなアプローチをとってもらえるとよいのではないか，私はそのように感じます。

なお，最近刊行された川口さん編集の『〈原爆〉を読む文化事典』（青弓社，2017 年）には，「朝鮮人被爆者を／が語る」という項目が立てられていて，黒川伊織さんが執筆しておられます。本報告とも深く関わる内容の項目ですので，ぜひあわせてご参照いただければと思います。

４．在韓被爆者李順基の自分史と丸屋博

以下，残された時間では，これまで述べてきたことに関わる具体的事例について，少し立ち入ってお話ししておこうと思います。

さきほど，すでにたくさん蓄積されているコリアンの被爆者からの聞き書きやコリアンの被爆者による手記をも包括する方向で私たちの「原爆文学」という概念を組み立てなおす必要があるのではないか，という提起をいたしましたが，そういう方向に踏み出そうとするとすぐに問われることになるのは，そのような聞き書きや手記はどのようなテキストと捉えればよいか，という問いです。程度の差はあれ，通訳者や翻訳者，聞き書きの書き手や編集作業の担い手の関与抜きに，聞き書きや手記について考えることはできないからです。ここには難しい問題が山積していますが，この点について考える手がかりをも与えてくれる稀有なテキストとして，在韓被爆者李順基さんの自分史があります（李順基「陜川で芽生えた広島のどんぐり」，被爆者の自分史編集委員会編『生きる―被爆者の自分史―』第 3 集〔同委員会発行，2002 年〕初出，丸屋博・石川逸子編『引き裂かれながら私たちは書いた―在韓被爆者の手記―』〔西田書店，2006 年〕再録）。本節ではしばし，この李順基さん（以下，敬称略）の自分史について考えてみることにしましょう。

李順基は，1930 年 12 月に，陜川出身の父とその父が広島で出会った朝鮮人の母とのあいだに広島で生まれ，そして育ちました。満 14 歳のとき，勤労動員中に被爆しますが，辛くも生き延びて，解放後，家族とともに陜川に移ります。「どん底の生活」を送るなか，1950 年に朝鮮戦争が勃発すると志願して兵士となり，休戦協定成立後の 1954 年満期除隊し，陜川に戻り，つつましい生活を送ります。その後健康上の不安が深刻になるなか，妻の勧めで韓国原爆被害者協会陜川支部に入会し，被爆者健康手帳を取得，1996 年には広島共立病院に 3 ヶ月間検査入院します。このとき広島医療生協原爆被害者の会のメンバーと交流したことがきっかけとなって，同病院の名誉院長で同会の会長でもあった被爆者の丸屋博との親交も始まることになりました。

その後，1998 年には広島原爆病院で喉頭癌の手術，2000 年には広島共立病院で胃癌の手術を受けますが，2001 年には広島共立病院で癌の肝臓への転移が判明し，もはや手術もできない病状であると告げられ，絶望した李順基は，そのまま帰国してしまいます。その李順基に，励ましの手紙を送り，闘病の支えとして自分史を書くよう勧めたのが，丸屋博でした。李順基は丸屋の勧めにしたがって自分史を書き始め，病気が進行してもはやペンを持てなくなったのちには，丸屋が陜川を訪れて李順基の口述を録音し文字化するというプロセスを経て，この自分史は完成されます。その様子は，NHK の番組「最期に綴ったヒロシマ―ある韓国人被爆者の遺言―」（初回放送 2002 年 1 月 26 日，NHK 平和アーカイブズで視聴可能，http://www.nhk.or.jp/peace/library/program/20020126_01.html 参照）に記録されています。

聞き書きや手記は，程度の差はあれ，語り手・書き手と聞き手・編集者との共同作業によって成り立つものだといえるでしょうが，李順基の自分史も，自身の驚異的な粘り強さと，丸屋の献身的な支えが相俟って，はじめて完成されたものだといえます。朝鮮戦争期には，一方は朝鮮半島で韓国軍に身を投じ，一方は日本で反米反戦運動に身を投じていたわけですから，50 年後に二人の協同でこのようなテキストが完成されるにいたったということには，深い感銘を覚えます。

今回の報告を準備していて気づいたことなのですが，このような二人の協同の基盤にあったのは，医師と患者という関係ではなく，同じ被爆者としての連帯だったのではないかと思います。この点と関わっては，「丸屋博」と「御庄博実」の二面性ではなく，「丸屋博」の二面性，すなわち，「丸屋博」は，広島共立病院院長（のち名誉院長）という医師としての側面と，広島医療生協原爆被害者の会会長という被爆者運動のリーダーとしての側面と，２つの側面を持っていた，という点が，重要であるでしょう。李順基との協同の基盤となったのは，「丸屋博」の，後者の側面であったといってよいと思います。

実際，広島医療生協原爆被害者の会は，2005 年発行の第 28 集で終刊となるまで，『原爆体験記 ピカに灼かれて』という冊子を，30 年近くにわたって発行し続け，被爆体験の聞き書きや手記を掲載し続けていたのでした。そこには，広島共立病院が渡日治療の受け入れ先となった在韓被爆者からの聞き書きも掲載されており，2001 年には同会と韓国原爆被害者協会陜川支部とのあいだで姉妹縁組もなされています。丸屋は，原爆体験記編集の長い実績のうえに立って，おそらくは李順基の日本語能力も見極めたうえで，闘病の支えとして自分史を書いてみるよう勧めたのだっただろうと思います。李順基の自分史は，突出した事例ではありますが，孤立した事例ではなく，長い取り組みの歴史と多くの聞き書き・手記をその裾野に持つテキストなのだということを，ここでは強調しておきたいと思います。

この自分史の細部にここで立ち入ることはできませんので，私にとって最も気になる点についてのみ，ここでは言及しておきたいと思います。この自分史は，「丸屋先生の言う，被爆者としての責任を果たして，命の絶えるまで自分史を書き続けて，日本の人，韓国の

人だけでなく，世界の人に知らせたい。韓国にもこんな被爆者がいると」という意図で書かれているのですが（前掲『引き裂かれながら私たちは書いた』，141 頁），その末尾は，かなりトーンの異なる，「今語り終えて，もう何もかも忘れたい，そんな思いです」（同前，142 頁）という一節で結ばれています。もう何もかも忘れて楽になりたい，というこの末尾の一節こそが，死に臨んだ李順基の最も率直な真情の吐露であるように私には読めます。そこから翻って考えてみますと，闘病の支えとして自分史を書けという丸屋の励ましは，ほとんど残酷なと形容してもよいような励ましだったのではないかと思えてきます。しかし，二人ともそのことは了解したうえでこの自分史に取り組み，完成させたのだろうとも思います。このように多くのものの賭けられたテキストとして私たちの前に遺されてあるこのテキストを「原爆文学」としてどう読むか，それが私たちに問われていることなのだろうと思います。

５．御庄博実『原郷』の詩的想像力と東アジア

丸屋博は，岩国で生まれ育ち，広島で旧制高校に通い，岡山医大で学んで医師となり，東京勤務ののち，岡山の水島に移って反公害運動に取り組み，1977 年の広島共立病院開院と同時に院長として広島に移って，被爆者運動・平和運動に取り組みました。

詩人御庄博実としては，岡山医大在学中から，峠三吉を中心とする広島の詩サークル「われらの詩の会」に参加するとともに，社会派の有力詩誌『列島』（東京）・『山河』（大阪）にも参加していて，1950 年代以来の詩作の経歴を持つ社会派の重要な詩人であるということになりますが，医師としての活動や社会運動家としての活動に惜しみなくエネルギーが注がれたためか，詩業の分量はそれほど多くなく，また若い頃と晩年に集中しています。

若い頃の代表作は，基地の街岩国とそこに暮らす自らの家族に視点を据えてアジア・太平洋戦争から朝鮮戦争にいたる現代史を描いた『岩国組曲』（文芸旬報社，1952 年）です。暗く重苦しい雰囲気に終始するこの叙事詩は，岩国基地から朝鮮半島に向けて飛び立つ爆撃機の音の聞こえてくる岩国病院の，結核療養中のベッドで，死を予感しながら書かれました。

晩年の代表作は，ここで取り上げる詩集『原郷』（思潮社，2006 年）で，表題詩を含む冒頭の 6 編は，李順基との関わりのなかで書かれた作品となっています。表題詩「原郷」の全文を引用しておきます。

> 人の一生は／一枚の地図である／山があり　川があり／道がきれぎれに続く／赤いインキの染みもある／いつもたどった道には／手指の脂がしみついている／陜川（ハプチョン）への道だ

「五十六年目の原爆症」／あの八月六日の劫火が／いま再び燃えあがる／あなたはいのちを削りながら／ヒロシマの日日からの／「自分史」を書く／焼け焦げた／ぼろぼろのマントにくるまって／歩いてきた道／陝川への傷ついた道は／紙の裏側から血を流す

あなたの目は／僕を見つめながら／はるか遠くを見ている／濡れている　あなたの視線は／ふるさとの墳墓を射る／泣いているのは山の声／果てしなく／遠祖へさかのぼっている

五十六年間／深い海の底で／あなたは／貝のように孤独であった

ふるさとに広島を根付かせたい　と／平和公園のどんぐりの実を拾い／陝川の庭で育てる／〈ビニールを外した今年の寒さが厳しくて　生き残ったのはわずかに数本であった〉と／遠い細い声で伝えてきた／きみの「原爆症」は／いまどれほどのいのちを削っているか

あなたの視線は／僕を貫いて／あの閃光を凝視する／地底深く水脈は／黙って原郷へ帰る

この作品の末尾の一節「あなたの視線は／僕を貫いて／あの閃光を凝視する／地底深く水脈は／黙って原郷へ帰る」は，とりわけ鮮烈な印象を残します。被爆地広島と「韓国のヒロシマ」陝川を詩的想像力においてつなぐ試みがここでなされていることが，なによりも重要な点です。そして，「僕」は，「あの閃光を凝視する」「あなたの視線」に「貫」かれる位置に身を置いていることに，とくに注意したいと思います。「僕」の想像力は「あなた」を媒介として在韓被爆者の「原郷」陝川に広がっていくわけですが，そのなかで「僕」は，「あなたの視線」に「貫」かれ，何者なのか問い直されることになるのです。このような，自己の問い直しをはらむ他者とのつながりをはぐくむ詩的想像力が働いている点が，この作品の優れたところであり，そのような詩的想像力が働いているという点で，かつて栗原貞子が「ヒロシマというとき」で声高に提出した課題への御庄なりの物静かな応答ともなっているように思います。

話を詩集『原郷』に戻しますと，李順基と関わる作品の次に，満州からの引揚者である妻の「故郷」を訪ねる作品が置かれている点は重要で，この詩集において「故郷」をめぐる想像力は東アジアに広がっていきます。続く第 2 部の作品では御庄の故郷岩国と彼が旧制高校時代を過ごした第二の故郷広島が舞台となりますが，基地に蹂躙される岩国，原爆により破壊された広島というイメージが，織り込まれていきます。他の作品も含めた詩集

全体として『原郷』がどれくらい成功しているかについては議論の余地があると思いますが，20 世紀の戦争と暴力，強いられた移動と被爆，といった問題を，東アジアというスケールの詩的想像力のうちにおさめとったこの詩集は，やはり注目に値する作品であると思います。そして，詩人御庄博実にそのような詩的想像力を喚起したのは，丸屋博としての在韓被爆者李順基との関わりでした。李順基の自分史も含めて，このような関わりのなかから生まれてきたテキストの総体を,「原爆文学」として私たちの視野におさめていくことが重要であるように思います。

おわりに

最後に 1 点だけ補足しておきますと，詩人御庄博実も，朝鮮人被爆者問題と深く関わりその関係の作品を残しもした御庄の友人の歌人深川宗俊も，彼らの雑誌や詩集の表紙絵や挿絵を描き続けた四国五郎も，みな朝鮮戦争期に反米反戦運動に身を投じた仲間たちであったという点には，よく注意しておく必要があるように思います。朝鮮戦争期に峠三吉を中心とするネットワークに加わり 3 度目の原爆使用を阻止するために立ち上がった人たちが，1970 年代以後も，朝鮮人被爆者問題・在韓被爆者問題に持続的に取り組んでいったわけです。これは，戦後日本の精神史の重要な地下水脈ですが，原爆文学の系譜を考えるうえでも重要だと思いますので，一言しておきます。

以上です。ありがとうございました。

【付記】

丸屋博と李順基の交流に取材した作品として，大門高子・文／松永禎郎・絵『やくそくのどんぐり』（新日本出版社，2010 年）という絵本が刊行されている。また，御庄博実は，金文柱報告の後半の主題となる高炯烈（コ ヒョンヨル）『リトルボーイ』の日本語版（コールサック社, 2006 年）に解説を寄せて,「主人公のひとり，金中輝（キムチュンフィ）が僕には李順基に重なって見える」（同書 213 頁）と記している。

在韓被爆者問題（韓国人原爆被害者問題）の歴史や，日本における在韓被爆者支援運動の歴史は，現在進行形の問題であり運動であるという事情もあって，まだ十分に記述されていないが，辛亨根（シンヒョングン）・川野徳幸「韓国人原爆被害者研究の過程とその課題」（『広島平和科学』第 36 号，2012 年）は優れた概観である。また，本報告を行ったのちに，在日本大韓民国民団広島県地方本部韓国原爆被害者対策特別委員会編集発行『韓国人原爆被害者 70 年史資料集』（2016 年 8 月 5 日発行）とイトウソノミ「権利を勝ち取るまで―日本で在韓被爆者を支えた人々―」（広島部落解放研究所紀要『部落解放研究』第 23 号，2017 年 1 月）を入手した。どちらも重要な文献なので，ここに付記しておく。